

九州の蝶屋たちとの初めての採集行。

福岡は宝満山の玄関口、太宰府天満宮に集合したのは可憐な蝶とどう見ても無縁そうな立派な中年男五人組であった。

ここで過激な初対面のあいさつが始まる。最年長ですでに七十歳を超えているK氏は「渡辺さん、本当の話でしょうか」

「はい、何ですか」「実は(実話)……」という落ちから始まった。

「八重山行きてえ、八重山行きてえ」と八重山病に侵されて久しいI氏が「不思議と蝶をやる人っていい人が多いですよねえ、でも渡辺さんは蝶をやるようには見えないですよえ」と言つ。私は「……」。某一流製鉄会社の部長にはどうしても見えないY氏は「今日はぼくが全部採っちゃうもんねえ」とあいさつもそこそこ走り出している。

私は「東風吹かば……」の有名な梅の木の前でI氏に尋ねた。「どういう意味ですかねえ」「東の風が吹いて……」「それじゃ直訳じゃないですか」と大の大人が学業の神様に大変失礼な問答を展開して

民報

サロシ

いた。

長崎県では大野原へ向かう車の助手席で、全く土地勘のない私が地図をにらみナビを担当している。「目的地まであとどの位ですか」という運転手。「地図で見るとあと七、八キロです」という私の超一流ギャグに全員があきれ返っていた。草原には全国的にすでに絶滅種に近

中年蝶採り隊が行く



渡辺 浩

いオオウラギンヒョウモンが舞っていた。「よかったあ、今年もちゃんと飛んでるよ。来年のために今年は採らずにそっとしておこうよ」と中年男たちはなぜかロマンチストの顔になっていた。

「はい、次のポイントに行きますよー」と慌ただしく向かったのは佐賀県大友海岸。先日の台風の影響なのか浜辺は

ゴミの山である。椰子の実なら歌にもなるだろうが、ペットボトルやビニールが散乱していた。クロツバメシジミを追う、大きなネットを片手に、ゴミに足をどう

れながらも全力疾走する。転倒する。決して美しいといえる光景ではなかった。「はい、次のポイントに行きますよー」とまたまた慌ただしく向かったのはイカ

刺しで有名な波戸岬。この岬に落ちる夕日はとても美しく、週末の夕刻ともなれば恋人たちのメッカにもなっているのがある。到着した今はその週末の夕刻なのだ。

「おいおいどうすんだよ、ここでネットを広げるの?」「しょうがないだろ」「シルビアシジミ採りたくないのかよ」「俺

は恥かしいよ」と中年男たちのヒソヒソ話が始まった。結局、五人一緒では何かと間違えられそうなので、別々に行動することにした。

夕日が海を真っ赤に染め、あちこちのベンチでは恋人たちが愛を語り合う。突然女性の悲鳴が聞こえた。どうやら土手を登っていたI氏が大きなネットを片手に、良いムードのベンチの前に突然現れ

てしまったらしい。何度も二人に頭を下げていたI氏の情けない姿が遠くに見えた。これでもう全員が戦意喪失であった。こうして九州の蝶屋たちとの初めての採集行は無事終了したのであった。

この珍道中をきっかけに、全員が毎週のように家を抜け出しては、普段会社や家庭では見せない満面の笑みを浮かべ、昔は少年だったことを確かめるかのよう

に、大きなネットを振り回し、中年隊の日々を満喫しているのである。ここ数年は毎年一度、福島に集合し、珍道中を繰り広げることが恒例となつて

(石川町北町、会社員)